

学生の卒業に思うこと

大西 祐紀子

助産学科教員

今年も20名の助産婦学生が卒業していきました。毎年この時期には、旧年度の学生たちの旅立ちに嬉しさを感じながらも、送り出した淋しさを感じます。一方、たった1年間ですが濃厚な時間を共有することになる新年度の入学生との新しい出会いを考えると、期待でわくわくし意欲がわいてくる時期でもあります。

ハードな1年間

助産学科の1年間のカリキュラムは過密です。新入生は、入学の喜びに浸っている間もなく入学式がすめば本格的な講義が始まります。学生たちは、助産が対象とするウェルネスの人々に焦点を当てて思考を展開させていくことに戸惑いを感じているようです。看護学科では、主に対象の問題点に焦点を当てて思考を展開させる学習をしてきたことが一因であると考えられます。いずれにしても学生たちは、思考の柱を切り替えることをごく短期間でやらなければならないことに大変苦労します。

4月中旬からは、早くも演習が始まります。スケジュールは過密ですが、演習では学生たちが相互にディスカッションする機会が多く、学生間の交流が深められ、親密さが増し、学習の楽しさにつながっているように思います。

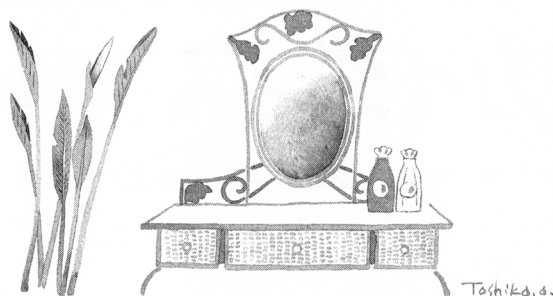
そして5月には、本格的に分娩介助技術をはじめとする技術訓練が始まります。この時期になると、じわじわと助産婦学生としてのしんじきを感じだしているように思います。分娩介助技術は、助産婦にとって大切な技術であることには違いあ

りません。けれども、最近ではいろいろなお産のスタイルがあって、さまざまなニーズに対応しつつ、対象の安全を確実に守ることが要求されています。つまり分娩介助の内容が、より個人的な希望に添うことを要求されてきて、確実に母児の安全を守りながらも、より柔軟性のある対応ができることが望まれているのです。

このような時代であるにもかかわらず、学生たちは、分娩介助技術をまるでお手前のように覚え込んでいきます。まず基本の形から入っていくことは、技術訓練の方法として正しいと思います。でも、それだけで終わらずに、決められた手順の一つひとつに込められた意味を丁寧に考え、理解しながら、将来の応用につながるように習得していった欲しいという願いは、時間的な制約のなか、学生たちになかなか届かないようです。

さらに、学生たちが習得すべき技術として各種の保健指導があります。6月には、両親学級をはじめ、入院中の褥婦に対する保健指導の実施のための企画に取りかかります。これらの企画にあたっては、対象のニーズに応えることが第一です。しかし、そればかりではなく「対象にどのようなものでもらいたいのか」という援助者側の願いのようなのをぜひ盛り込んでもらいたいと思いながら、学生たちとかがわっています。

でも、指導案に学生のオリジナルな発想を見つけられることは、かなり稀なことです。たいていは、型どおりの原稿が提出されてしまいます。入学時には、あんなことも、こんなこともしてみたいと考え、思いを巡らし、学生一人ひとりの表情



もいきいきしていたと思うのに……。学生たちの姿勢をみていると、なんだか「やらされ意識」が蔓延しているように思えるのです。保健指導の企画という課題に取り組みだすこの時期は、臨地実習も始まっていて学生たちに心の余裕が少しずつなくなってくる時期なのでしょう。日々の実習の疲れのせいか、顔の表情も曇りがちになってきます。

分娩介助や保健指導の企画にあたって、学生たちに願いが届かないのは、こちらの伝え方やかわり方がまずいことも事実だと思います。これについては謙虚に受けとめ、思いがうまく伝えられるような工夫と努力をしていきたいと思っています。また、カリキュラムを検討していく作業も必要だと考えます。けれども、なによりもまず、助産婦学生が置かれている現状、つまり時間に余裕のない状況が無関係ではないと感じています。

学生たちには短期間に次々と新しい学習内容が伝えられ、課題が与えられるのですが、それらを消化する時間が不足していると思うのです。それぞれの課題を同時進行ではなく、一つずつ仕上げていくというやり方ができれば、学生たちの意識も違ってくるのかもしれませんが、1年間ではそれこそ時間が足りなくなってしまうます。複数の課題を何とか同時進行でこなしている今でさえ、継続事例のケーススタディや調査研究をまとめるには、国家試験の少し前まで時間を取らねばならず、それらが最終的に仕上がるのは卒業式の1週間前です。また、今のように分娩数が減り続けている中で分娩介助実習は、時間内に必要例数が

こなせず、産直実習が必至の状況にあります。産直実習をしても、分娩介助例数が十分でないことも少なくありません。産直に入るといよいよ学生たちは、疲れてしまっているように感じ、かわいそうにさえなります。けれどもその反面、そんな学生たちに対して、自分の夢を実現させるためなのだから頑張りたい、もう少し踏ん張りたいといったはがゆい思いも抱いているのです。

「やらされ意識」から「やっている充実感」へ

助産婦学生として習得すべき内容については、すべて習得することが前提です。けれども学生たちにとっては、新しい知識や技術を学んでいく際、考えたり迷ったり、試行錯誤するための時間はとても大切です。習得した知識や技術を、自分なりに成熟させる時間を持つことによって、学生たちは自分の助産観と向かい合うことができ、さらにそれを自分なりに育てていけると思うのです。そして、自分の助産を謙虚に振り返り、より良いものを目指して進んでいって欲しいと思います。

時間ばかりたくさん与えても、それが必ず実を結ぶものでないことは、体験から知っています。でも、学んでいく過程にももう少しゆとりをもちたすことはできないもののでしょうか。もし、1年のカリキュラムを2年かけてやっていくことができたなら……。学生たちのいきいきした顔が曇ることも少なくなり、「やらされ意識」でなく「やっている充実感」が生まれてくるのではないのでしょうか。

来月は大阪市立助産婦学院の寺田恭子さんです。